

「結核菌バンク」と 「疫学情報センター」の開設

結核研究所所長
石川 信克



結核予防会結核研究所は、平成20年9月に新しい組織編成のもとに活動が始まった。これは19年度になされた外部有識者による「あり方検討委員会」での検討や提言にもとづいてなされたものである（資料）。

結核研究所は、従来、研究、リファレンスラボ、対策支援（研修と技術支援）、国際協力を4つの柱としてきたが、それらの基本的な機能を継承しつつも、いくつかの新しい視点による組織編成がなされた。その概略と新しくできた2つの機能について述べる。

研究部名称の廃止と研究の強化

研究活動は結核研究所の中心である。まずわが国、そして世界の結核制圧を促進する対策のための研究を優先的に行うという認識に立ち、体制を強化するため、従来の研究部という名称を廃止し、上記4つを柱とする部がすべて研究部であるとした。すなわち、臨床・疫学部、抗酸菌レファレンス部、対策支援部、国際協力部である。各部は、重要な業務も持つが、研究を中心的課題とする。横断的機能を持った従来のプロジェクト制は継続し、各部・事業の連携を図る。

結核菌検査・保管施設（菌バンク）の設置

改正感染症法下の病原体管理の強化に伴い、菌株保存ができない施設で、検出された菌が散逸する恐れがあるが、必要な菌株の保存は制圧に向けた対策研究のために必須である。菌バンクにより、必要な菌種の保存、維持管理、集まった菌株の分析、菌情報の収集管理、その分析結果の発信など病原体サーベイランス構築の基礎ができる。

病原体サーベイランスは、先進諸国の多くで、体制が確立されつつある。日本では、まず病原体検出システムとしての抗酸菌検査精度保証システムが未整備であり、薬剤耐性調査や分子疫学調査も定常的サーベイランスとして確立されていない。また近年の病原体取り扱い基準の厳格化に伴って、検査自体を行う施設も減少している。

例えば、日本の代表的耐性結核菌サーベイランスである結核療法研究協議会による最近の全国調査では、多くの施設が多剤耐性結核菌を不所持としたため、参加施設や検体数が減るといった事態が起こっている。日本の菌に関する疫学情報を正しく把握するために、よりよいサーベイランスシステムが求められ、本施設の役割が期待できる。また結核診療施設、検査センター、地方衛生研究所等とも連携を強化し、国の菌情報に関する一元化の要になることが目指されている。また近隣諸国からの患者の流入が盛んになってきた昨今、国際的な菌の情報管理も重要である。

疫学情報センター

結核の疫学的サーベイランスに関する活動は、従来から結核研究所の重要な機能であったが、研究部の研究活動の一環として位置づけていた。今

回センターという名称のもとで、恒常的な位置づけをしたものである。「結核の統計」の編纂をはじめ、国の結核登録者情報システムの運用を支援し、そこから得られた情報を整理分析し、国及び地域の対策に必要な結核疫学情報として発信していくとするものである。また、結核疫学に関心のある研究者や一般の人々にも結核の疫学状況を伝えていく。

結核が減少しつつあることは喜ばしいことであるが、低まん延化（10万対1以下の罹患率）には、まだ10年以上はかかると考えられ、さらに制圧（人口100万対1以下の罹患率）には半世紀以上が必要である。しぶとく社会に残り続ける結核は、減少すればするほど複雑化し、対策は複雑・困難になる。それに対し、結核研究所は国立感染症研究所、各地方自治体の衛生研究所、保健所、検査機関、大学等を含めた研究機関と協力・連携しつつ、正しい疫学情報、菌情報の把握や分析を行い、効果的な対策研究を推進していきたいと考えている。

資料：「あり方検討委員会」提言のまとめより

- 1) わが国の結核罹患は、未だ中まん延状況にあり、様々な問題を抱えている。今後、低まん延時代に入ったとしても、健康危機管理上、国の重要な課題として不可欠の役割を担うことを確認しなければならない。また世界的に見て、結核は最も優先順位の高い健康問題に位置づけられており、その制圧のために世界中のあらゆる組織による連携の強化が必要とされている。
- 2) その背景の下で、わが国は結核制圧の目標を掲げ、まず早期の結核低まん延化をはかる必要がある。一方、結核低まん延化の動きの中では、人材確保や対策実施における技術的適正性の確保が困難になる可能性が高い。またわが国に求められている重要な国際的役割を考えれば、わが国が最も得意としてきた結核分野において、アジアの戦略的拠点作りを含め、世界の結核制圧のために一層の貢献が必要である。
- 3) 結核研究所は、対策推進のための基礎及び応用研究、対策の技術支援、人材育成に成果を上げてきたが、上記の目的に資するため、国内、国際的ニーズに適合した活動を、諸機関の連携の中核になって、効率的・効果的に実施できるよう、重点的な活動を見直し、強化することが重要である。
- 4) 研究は結核研究所の諸活動の基礎であり、わが国および世界の結核制圧に道を拓くような研究を基本とする。研究活動から十分な成果を上げられるよう、重点的な人員・予算の配分、適切な優先課題の選定、実施体制の見直しによって、有用かつ質の高い成果を産出し社会への還元を推進する。
- 5) 抗酸菌リファレンス機能、対策支援機能については、ニーズの動向に沿った活動の見直しをする。特に菌バンクの設立は極めて重要な課題である。国際協力については、結核研究所（RIT）の国際的ブランドを強化し、アジアにおける戦略的基地となる。研究所としての本来の役割を果たしていく必要がある。
- 6) 上記の認識に立ち、結核研究所は今後の対策における役割を果たすため、人的資源の確保・活用、組織編成・運営の見直し、業績の適切な評価や公開を行う必要がある。
- 7) 財源については、低まん延を来している他の先進諸国のような中央（国）の関与の強化が必要であるとともに、多様な財源の確保、特に競争的資金の獲得及びその有効活用のためのあらゆる努力を怠ってはならない。